

**島之内教会だより**  
 第32号 2016年4月3日発行  
 〒542-0083  
 大阪市中央区東心斎橋1丁目6番7号  
 TEL&FAX 06-6271-8292



Yasuda Yasuyuki

つくづく成長されたなあと感じます。教会との関わりは島之内教会だけでなく、千里丘教会でもよい機会が与えられました。

千里丘教会に小さなポジティブオルガンがあるのですが、そこでの演奏の機会を頂いたとことで、わたしもレッスンに行ったこともありましただね。その他、大阪南Y.M.C.Aでわたしが指導している女声コーラスのグループに何度も手伝いに来てくれました。もちろん島之内教会でも聖歌隊にご参加くださっていることで、彼女がよい声を持っていることはご存知の方が多いでしょう。

ずっと長く教会にいらしていても教会員ではなかったときにくらべ、教会員となるとまた違った面が（よいことばかりではなく）見えてくることもあるでしょうし、教会員になつたからといって悩みがなくなるわけではありません。でも、神の救いを確信する仲間と共に歩んでいけるといことは、苦しい時の支えとなり、悩み迷う時の希望の光となると思います。これまでも長く協力してくださいましたが、これよりまた一層わたしたちも励まされます。島之内教

会の仲間として、共に歩んでいきましょう！

**長春病院長 藤中 泰**

**(島之内教会員) 墓碑撰**

世上多くの人々は目先の利益を手に入れようと争い、また僅かばかりの金を欲しがる風が天下をおおっている。然し、わたしの友人である藤中君はこれと反対であって、早くから府内において慈善家として名を知られ世俗の迷うことがない。わたしとは道ひと筋離れた所に住んでいる。それで風流の風に誘われて興が湧いて来た時には、彼は庭にある野菜を摘んで私を招き、共に杯を交わすという日常が何年と続いて来た。およそ君の性質たるや温厚篤実で、医家の中に育ったが、幼くして両親を失う悲運に会い、誰と頼る者もなく、苦勞を重ねた。苦學して父親の遺した医業を継がんとし、昼は労働に従事、夜は勉學に専心し、明治22年医療の全科目に就いての免許が国から与えられ、翌年長春病院院長となった。独力で病院の管理にも力を入れ、病人に対しても親切であったので、病院は日に日に隆盛となり、

それにつれて収入も増加した。然し君は財を蓄えてぜいたくをすることなく、患者の中に貧しい者があれば、無料で診察し薬を与え、着る物を施し、不幸にして病死する者が出れば、葬式の面倒を見、墓を建ててやった。また毎年おみそかになると、大金を懐中にしのばせて貧民部落へ微行し、これを与えることを、この上ない楽しみとした。君はまた結婚して新妻を迎えた時、「慈善の行いに励み、公の為に働くことが自分の一生の目的であって、蓄財に走り、衣食にぜいたくするようなことは決してしない」と、彼女に誓って言った。

然し後になって、彼がその約束を破り、そつと金を貯えている形跡があるようなので、妻女が事実を質した彼の答えて言うには、「そんなことは毛頭考えていない。実は長堀川には橋が少ないために交通がたいへん不便なので、新しく橋を架けて、少しでも人々の難儀を軽くしたいのだ」と。

後年彼の私費を投じての橋が実現したが、これを藤中橋と呼んだ。

君の社会に奉仕する実績は名声を産み、その名はこの地でも識らぬ人

**なぜ、泣いているのか**

牧師 木戸 定

マグダラのマリアは弟子たちのところへ行つて、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

ヨハネ福音書二〇章一八節

イースターの朝、「マリアは墓の外に立つて泣いていた」（ヨハネ二〇章一節）と記されています。

「死」には、第二人称の死と第三人称の死があります。人生を共に歩み、苦樂を共にした家族、友人、仲間の死、それを第二人称の死と呼び、自分とは関わりがなかった他人の死を第三人称の死と呼びます。この死は、「かわいそうだ」と同情することはあつても、悲しみの感情は湧いてきません。しかし、人生を共に歩み、

たくさん思い出がある、愛する者の死は深い悲しみと喪失感をもたらします。この「マリア」は、マグダラのマリアです。かつて、主イエスから七つの悪霊を追い出していただいたことのある女性です。七つもの

とて無きに至つたが、不幸病を得、養生の甲斐なく、明治44年5月17日永眠するところとなった。

君亡き今、私はいつたい誰と折にふれ歎びを尽くしたらよいかと思つと、そぞろ悲しみの念が湧き上がってくる。

せめて君生前の事績を後世に伝えんとし、碑を建ててにあたり、その意を刻むこととした。深い交わりを君とは重ねたが、さて文章にそれを現さんとして浅学菲才、意を尽くすこと能わぬが、謹んで今、これを君の霊前に捧げることとする。

谷口武兵衛撰

**編集後記**

今回は、受難節、イースターについて原稿を寄せてくださいました。ありがとうございます。また、イースターには洗礼式を行うことができ、感謝です。新しい仲間が加えられ、より一層福音宣教の業には励みたいと思います。新しい年度も、これまで以上に主にあつて素晴らしい日々でありますようにお祈り致します。

(木戸 定)

悪霊にとりつかれた症状がどのようなものであつたのか分かりませんが、しかし、その病気のゆえに、差別され、嘲られ、白眼視され、辛い日々をおくつていたに違いありません。そんな彼女は、イエス様に出会い、癒され、自分に対する誇りを取り戻しました。そして、主イエスと共に伝道の旅をするようになりました。

そんな彼女にとって、イエスの死は深い悲しみと喪失感をもたらしました。だから、彼女は墓の外に立つて泣いていたのです。

しかし、天使たちも、主イエスも「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言われたと聖書に記されています。彼女が泣いている理由が分からなかつたわけではありません。悲嘆に暮れ、絶望する必要はない言われたのです。

精神的な苦しみであれ、肉体的な痛みであれ、それが耐え難いものであれば、私たちは生きる望みを失つて、いつそのこと死んで楽になりたいて思つてしまうものです。マリアが、この時死を望んだわけではなないと思います。しかし、愛する者の死は、耐え難い痛みであつたに違いないのです。

そして、私たちは誰もがその人しか背負うことのできない重荷があります。かわいそうだと思つても、代わつてあげることができず、その人自身が引き受けることができるように祈り、見守るほかなない現実があります。そして、見事にその人が引き受けている姿を見て、深い感動をいただくことがあります。神谷美恵子さんは、「癩者よ」という詩のなかで「何故私たちがなくてあなたが？ あなたは代わつて下さつたのだ。代わつて人としてあらゆるものを奪われ、地獄の責苦を悩みぬいてくださったのだ」と語つておられます。癩者に対する暖かい言葉であると同時に、癩病という重い病を背負い、見事に引き受けて生きておられる姿に畏敬の念と賛嘆の声をあげておられる言葉です。

自分にはか背負うことのできない厳しい現実を見事に背負うことによつて、私たちは世の光として暗い社会の一隅を照らすことができるのだと思います。マリアは復活の主に出会い、「わたしは主を見ました」と告げることのできる人生を生きるようになりま